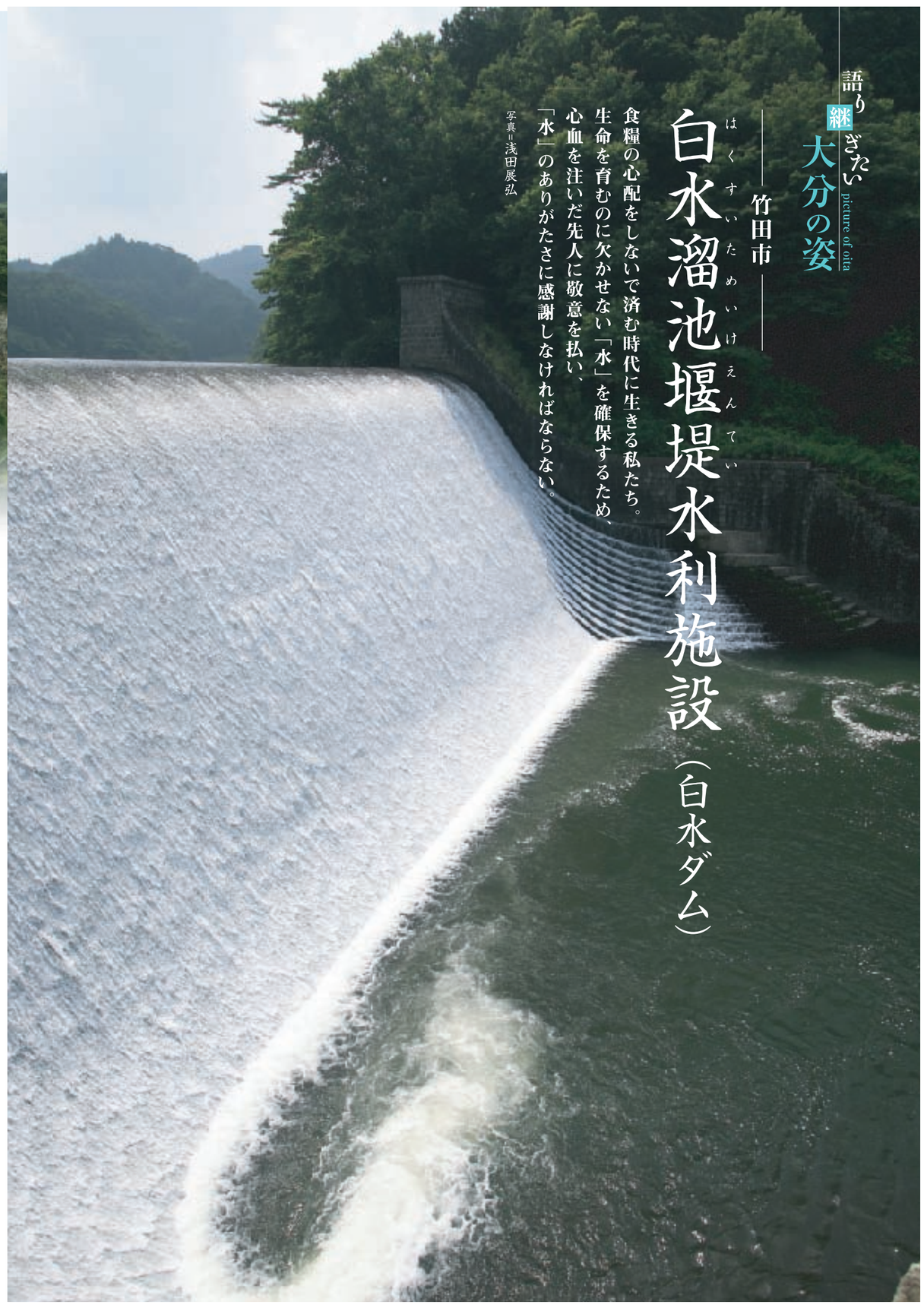
―竹田市―
白水溜池堰堤水利施設（白水ダム）

食糧の心配をしないで済む時代に生きる私たち。生命を育むのに欠かせない「水」を確保するため、心血を注いだ先人に敬意を払い、「水」のありがたさに感謝しなければならない。

写真＝浅田展弘



エピソード❶
日本の棚田百選にも選定されている「軸丸北の棚田」。昔は、水田はわずかで湧き水を利用していた。安政5年（1858年）、軸丸村の納めていた年貢米が藩の御倉で「むれ米」となったので、これを良い米と取り替えて納めるように藩からの厳命が下ったが、すでに収穫の８割を納めていた農民にはこれに代わる米の蓄えがあるはずもなく、泣く泣く土地を手放したり借金で急場をしのいだりした（むれ米事件）。

エピソード❷
ききんなどに苦しむ農民の惨状を目の当たりにし、富士緒井路開削の発起人となった、大工「後藤鹿太郎」。慶応３年（1867年）、農民救済のため、井路を作り軸丸の田畑に水を導き新田を開発しようと、たった一人で水源地を探し求めた。私財を投じて人を雇い、測量、交渉、世論の喚起とあらゆる方策を探り続けたが、手に余る大事業だったため、明治29年（1896年）に事業中止となった。

エピソード❸
一度は事業中止となったものの、後に水利組合が結成され、大正３年にようやく通水するに至った富士緒井路。素堀りのため水漏れが激しく、末端では水争いが頻発し、水量確保のため上流にダムの建設が急がれた。

富士緒井路土地改良区理事長
後藤良治さん

近年、白水ダムの景観がクローズアップされ、訪れる人が増えつつある中、「この美しい景観は、地質を考えて水速や水圧を緻密に計算した結果として、なるべくしてできたものです。観光地ではなく、あくまでも現役の農業用水利施設。先人がこれほどまでに苦労して水を確保し、米を作ってきたということを知っていただきたいですね」。

大野川の源流とされる白水（しらみず）の滝。落差38m。明治38年に白水井路が完成し、この滝の水を取り入れて約120ヘクタールを開田するまでは、約100mに渡って湧水が飛び散り白く輝いていたと伝えられている

白水（はくすい）ダム

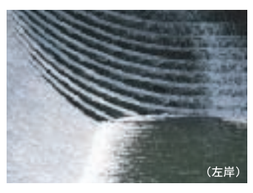
ダム築造にあたって、一帯は阿蘇溶岩でできており、岩盤も溶岩質で非常に脆弱（ぜいじゃく）だという難問が待ち受けていた。設計者の小野安夫は、川底の岩盤の弱さをカバーするため、どのようにして落下する水の圧力を弱めるか、また傷みやすい側壁部分に無理がかからないようにいかに工夫をこらすかに腐心した。

右岸部はなめらかな曲線にすることにより水が滑るように流れ、左岸部は半円状のカスケード（小滝）を階段状に幾重にも重ねることにより水圧を分散させた。堰堤全体の表面に目の粗い切石を積み上げたのも、あふれ出る水を水泡状にすることによって勢いを減殺させるためである。数々の悪条件を逆手に取り、自然に逆らわない形で考え出した小野の苦心の結果が、ダムの芸術とまで言われる流水美を生み出した。

ようやく人々は生命の水を得たのである。

（「白水ダム物語（岡の里事業実行委員会）」より）

（右岸）



（左岸）

堰堤（えんてい）の表面全体に１個１個積み上げられた石が、見事な曲線を描き、オーバーフローする水は素晴らしい幾何学模様を描く

”景観といのちを守る疏水の里　大野川流域　緒方、荻、竹田“
溜め池の女王・白水ダムを中心に
そこには井路にかける、先人たちの汗と苦闘の歴史があった

文＝永松秀敏（元大分合同新聞文化部長）

「日本の文化は、水を仲立ちにした人と大地との営みの結果である」と水評論の第一人者富山和子氏はその著「水と緑の国、日本」（講談社刊）の中で述べている。水がなければ日本の水田稲作文化はなかった。

大分県豊肥地区、中でも大野川流域はなぜか水路が多い。それは特殊山岳地帯に象徴されるように、急峻な中山間地が圧倒的に多いからだ。いかにして高台の棚田に水を揚げ水を張るか。源流に近い大野川支流から疎水を引くしか方法はない。用水路の多い大分県は紛れもない農業県の裏付けでもある。

豊後岡藩の財政を支えた穀倉地帯緒方平野。水路の多さは群を抜く。伝統の緒方五千石祭が今に残るように、豊かな水田を擁しながら高台にある旧小富士村、旧緒方村は落差が大きく水が揚がらず、江戸末期の大干ばつで一粒の米も採れず農民たちは飢え寸前の危機にあった。

ここから富士緒井路と源流白水ダムの物語りが始まる。江戸末期安政の頃と言うから百数十年前にさかのぼる。谷間の湧き水と天水が頼りの水田稲作はちょっとの天候不順で凶作に陥る。年貢に不良米を出した関係者が追放になる事件が起こる。悲惨な体験の経験者後藤鹿太郎が立ち上がる。素朴な匠の技（測量）を生かし水路の線引き、水源探しを始める。

同志を募り水利組合設立に動くが県の許可が下りず紆余曲折の末、明治42年大野郡長を管理者に立てやっと認可がおりる。大正3年幹線水路の通水を見る。水量確保で、富士緒井路は農家のいのち綱として一世紀の歴史を重ねる。昭和に入って完成した水源の溜め池 ”白水ダム“ とのネットワークで流域４００ヘクタールを沃野（よくや）に変える。

その土地改良区に戦後職員として採用され理事長四期を含め44年間、人生の大半を井路に捧げた足立貞良氏（84）＝同市緒方町草深野生まれ＝は、数年前井路への思いを一冊の本「水に生きる」にまとめた。水田稲作を裏方で支える労苦が全編にあふれる。感慨を込めて水路への思いを、「当時、周囲の反対を押し切り第二発電所建設に踏み切ったこと。いまは電力収入で農家の負担が大幅に減った。何も報いられることのなかった初代開削功労者の鹿太郎翁の銅像を建てることが出来たこと」と語った。

井路は全長約16キロ。石組みのため水漏れが激しく上流にダムの建設が急がれた。堤長90メートル。大野川の支流大谷川を堰止める大土木工事。昭和7年着工にこぎ着け13年に完成。設計、監督の総指揮を取ったのが県土木技師小野安夫氏（九重町）であった。

粗石、石張りの重力ダムと呼ばれるように、下流から見上げると堰堤曲線の表面に煉瓦状の粗石が実にきめ細かく張り詰められている。白水の名のように、純白のカーテンにも似て流れ落ちる水流の美しさはダムの女王と呼ぶにふさわしい見事なもので、設計の非凡さは日本土木学界でも注目された。私事で恐縮だがこの白水ダム物語は１９９６年９月、県地域経済情報センター広報誌「情報おおいた」の「シリーズ人物」に書かせてもらい、１９９９年３月農業土木構造物としては全国で初めて国の重要文化財に指定された。翌２０００年度版の「日本の米カレンダー」でも大きく取り上げられ全国的に話題になった。

国指定には日本近代建築史の第一人者で、生前何度か来県した文化庁文化財保護審議会専門委員を努めた村松貞次郎博士（東大名誉教授）の尽力があったことを付け加えさせていただく。農民がいのちを張って作り上げた用水と灌漑（かんがい）用ダムには、水田稲作への先祖たちの迸り出るような魂が刻み込まれている。

標高５００メートル。阿蘇外輪山の東側山ろくに位置する荻地区。阿蘇の大地から水を引く父子二代にわたる壮絶な通水物語が残る。旧柏原村長をつとめた息子垣田幾馬氏の銅像が旧荻町役場前に建つ。サイフォンの原理の音無井路など水路の多さは緒方に劣らない。

祖母山麓の水を緒方川から取水し清川、緒方一帯を潤す明正井路、それを通す六連の美しい石拱橋、日本棚田百選に選ばれた軸丸北棚田、大野川源流の白水の滝、疏水百選に緒方の疎水、竹田城原の神田頭首工、そして名水の里「竹田」。未来にぜひ残したいかけがえのない近代化遺産の宝庫でもある。

日本ほど四季の変化に富んだ国はない。豊かな自然景観を支える二大要素は「緑」と「水」である。発電所を含めこれほどの水利施設が緑の田園に集中するも珍しい。貴重な風景は文化財保護法などの単純な発想では守れない。”疎水の里“ は国が推進する生きた田園空間博物館構想もある。

「豊かさ」とは黄金（こがね）色の稲穂がたわわに稔り波打つ姿を言う。大分県が豊の国と言われる由縁はそこにある。二千年の昔から「水」と格闘した先祖たちは、この稲穂のために「水」にいのちをかけたのである。

国指定重要文化財の認定書

白水ダムの設計図。地質と水圧を考えた緻密な計算のもと、設計されている

土地改良区の理事長４期を含め、富士緒井路に人生の大半を捧げた足立貞良さん。44年間の水路人生を振り返りながら語る

【参考文献】
◇大分県の近代化遺産・近代化遺産総合調査報告◇（大分県教育委員会）
◇情報おおいた・シリーズ人物1996年5月号「垣田幾馬」、同9月号「小野安夫」
（旧大分県地域経済情報センター、現（財）大分県産業創造機構刊）
◇水の文化史（富山和子著　文芸春秋）
◇水と緑の国、日本（富山和子著　講談社）　◇水に生きる（足立貞良著）
◇富士緒井路水利史（同井路土地改良区、大分県農政部）
◇富山和子のつくる―日本の米カレンダー、2000年度版5月「白水ダム」（株式会社サン制作）
◇日本航空PR誌「WINDS」1995年5月号、大分漫遊記、豊の国で出会った石造文化（（株）日本航空文化事業センター）
◇白水ダム物語（企画・編集　岡の里事業実行委員会）
◇疏水百選（全国水土里ネット・都道府県水土里ネット企画制作）
◇白水ダム重文指定、近代化遺産で県下初（大分合同新聞、1999年3月20日付け朝刊）
◇OBSテレビ「新時代おおいた」＝21世紀に残そう、歴史的遺産、土地改良施設（2000年9月20日放映）

明正（めいせい）井路第一拱石橋（こうせききょう）。明正井路は、緒方川から取水し、幹線の総延長48km、分派した用水路の総延長127kmという大規模な水路。緒方川のかなり上流から引水したため、谷は橋をかけて越え、山はトンネルを掘り進むという難工事だった